

食べ物も特定の店でしか買えず、すれ違う人に緊張していた。

夢の中で見たことだけど、それが現実だった。

そしてこの平穩の中でぬくぬくと暮らしている俺は、コーヒーを飲み終わると、その足でバイト先へと向かった。

藤原に、『よく続くなあ』と言われたバイト先は、『レグブル』という名の雑貨店だった。

雑貨店というと、女の子の好きそうなファンシーな品物が並んでいる可愛い店を想像するだろうが、『レグブル』は違っていた。

俺のマンションの近くにあるその店は、長らく閉まったままの木造の店だった。

元々はおばあさんが駄菓子屋をやっていたらしいが、そのおばあさんが年老いて息子夫婦の元に引っ越したということ、トタンで塞がれた店の前は自転車置き場と化していた。

風景の中に溶け込み、そこに店というものがあることすら知らなかったのだが、ある日その前を通ると、自転車全て取り払われ、小さな店が開いていた。

一体何を売っているのかわからないその店を、面白そうだと思って足を踏み入れたのが一カ月前。

中は、意味不明なものが雑多に並べられている、物置のような状態だった。

エジプト辺りの、ヒエログリフの刻まれたペンダント、ヨーロッパのアンティーク、北欧の食器。写真集と絵本の横には、何故か古着が積まれている。

面白いとは思った。

最近、どこで買い物しても、似たような品揃えばかりでつまらないと思っていたところだったから。

しかもそのガラクタの中に、以前から探していた洋書の写真集を見つけてしまったのだ。ペーパーバックで、もう出版社が潰れてしまっていたので、取り寄せもできないと諦めていたのに。

俺はすぐにその本を買った。

その時、店主の夏八木さんが、その写真集には二冊目があると教えてくれたのだ。

「それも欲しいです。取り寄せていただけますか？」

と訊くと、彼はレジカウンターの奥の部屋を指さした。

「取り寄せなくても、あの山の中にある」

示された奥の部屋には、山のようにダンボールが積まれていた。

「見つけたら取っというてやる」

「いつでもか？」

「さあ。順番に開けてりゃいつかは見つかるだろ」

つまり、適当に詰め込んだ箱に何を入れたか、本人もわかっていないということだ。

「早く欲しいんなら、自分で探すか？」

その一言が、きつかけだった。

以来、俺は『レグブル』に通い、奥の部屋に積まれた山のような箱を開けている。

望んでいた本は既に発見したが、開ける度に出てくる奇妙なものに魅了されてしまったのだ。

駅から店へ向かう途中のパン屋でパンを買い、真つすぐに向かう店。

駅の南側はアーケードのある賑やかな商店街だが、北側は昔からの小さな商店がポツポツと並ぶ、ちよつと寂しい細い道。

その道の途中に、『レグブル』はあつた。

酒屋の向かいで、豆腐屋の二軒隣。

入口は間口の半分が開けっ放しで、木戸の閉まった残りの半分の前には木のベンチが置かれている。

今は誰もいないが、時々買い物帰りのおばあちゃんが座っていたり、学生達がコンビニで買ったものを摘んでいたりする。

どちらも店の客ではないのが寂しいが。

「こんにちは」

一声かけて中に入ると、薄暗い店の奥に座っていた男性が顔を上げた。

いい加減に伸ばした長い髪、顎にまばらな不精髭、彫りが深く日に焼けた濃い顔は整っていて、ちよつとアラブ系の人にも見える。

この人が、この店の主人、夏八木さんだ。

「パン買ってきたよ」

パン屋の紙袋を掲げて見せると、彼は啞えタバコのまま立ち上がった。

「コーヒー淹れてくるから、客が来たら相手しとけ」

と言つて奥へ消える。

客なんて、滅多に來ないんだけど、それを指摘しないのは大人の氣遣いだ。

レジカOUNTERの前にある小さな丸椅子に腰を下ろすと、俺は店内を見回した。

入口から『コ』の字状に作られた通路は、半分閉じた板戸のせいで突き当たりが暗い。明るい入口側の通路には、一般受けしそうな商品を。ドン突き側の薄暗い方には日に焼けてはいけな本等を置くようにしたのは俺だ。

最初に來た時には、昆虫の標本の隣にレースのコースターがあり、白いガラス製のカップの隣に本が置かれていたり、あまりにまとまりがなかつたので、せめてカテゴリー別にしてあげたのだ。

もつとも、彼はそのことについて礼など言わず、『普通っぽくなつたな』と言つただけだつたけど。

天井から足元まである壁の棚も、今は一応すつきりしているが、時々品物が売れて空いたスペースができると、勝手に変なものが置かれていたりするのでチェックは必要だ。

今日は変化はないようだけれど、ということは売れてないってことかも。

パソコンばかり見ていないで、もつと商売つ氣を出せばいいのに。

両方の通路が見渡せる奥にあるこのカウンターも、レジカウンターと呼んではいるが、客が來ないから夏八木さんの作業台のようになってる。

「ほら、コーヒー」

今も、コーヒーのいい香りがするカップを持って戻ってくると、パソコンを下ろして食事のテーブル代わりだ。

「今日は何だ？」

「バケットのサンドイッチ。クリームチーズとポークパストラミの」

「そいつはいい」

彼の淹れてくれるコーヒーは、豆が違うのか、他所^{よそ}で飲むものよりも甘味がある。

いつもそれを淹れてくれるから、お礼にとパンを買ってくるようになったら、何となくこの遅いランチが定例になってしまった。

「明日は夕飯^{お昼}奢^{ちか}つてやるから、何がいいか考えておけよ」

「もう五回目？」

「覚えてないのか」

「数えてる方がいやらしいでしょ」

「お前はつくづくお坊ちやまだな」

からかうような口調で言われ、俺はふん、と顎を突き出した。

「そうですよ。だからおっとりしてるんです」

「どこがだよ」

椰揄^{やげう}されて言われているわけではない。

彼くらいの齡では、学生なんて苦勞がなくていいと思われるものだとな納得しているから聞き流す。

それに今の会話は、彼の心遣いだとわかっているのだ。

俺がパンを買ってくるのは、自分が好きでやつてることなのだが、彼はそれをよしとはせず、俺が五回パンを買ってきたら彼が一度夕飯に連れてってくれるという約束してくれたのだ。

大して儲^{もつ}かかってるわけでもないだろうに、そう言ってくれるのは、彼が礼儀正しい人間だとい証^{あか}しだろう。結構ズボラに見えるのだが、金銭にはきっちりしているらしい。

「鏡は大学三年だったな」

「ええ」

「就職の方はどうなんだ？」

こんな定番の質問を向けてくるところも、常識人っぽいな。

「もう内定取ってるから平気」

「内定？ 三年だろう？」

「まあ、正式じゃないけど、父親の関連の会社が来ないかって言ってくれてるから多分そこに勤めるよ」
「今時はそういうもんかね」

年寄り臭いセリフ。

そんな齡でもないだろうに。